

第2回 生活科研究部研修会

令和5年8月1日

講話「探究的な学びの素地を育む生活科

～『生活・探究・生き方』で捉える授業づくり～

愛知教育大学 加納 誠司 教授

生活科では、遊び込んできている幼児教育での学び育ちを生かすことが「架け橋プログラム」として大切になっている。1年生では「無自覚の遊びを学びとして自覚させる」こと、2年生では「自立に向かって生活、生き方を科学する」ことなど「心を動かす体験から学びを構築する」ことを目指していきたい。



<実践紹介>

○愛知教育大学附属名古屋小学校 1年生「わくどき ふしょうツアーズ」

自分たちで案内したい場所を決めてお家の人を招待する活動を行った。お家の人も自分たちも笑顔になれたことから、今度は教育実習生を招待することになった。しかし、グループの数が合わないことから、子供たちの話し合いがスタートする。

「実習生の数が合わないから、グループをばらばらにしないとダメ。」

「名前も旗も変えないといけない。」

「チームを変えると、行きたいところに行けなくなっちゃう。」

この実践を支えたのは、ギャラクシータイム（言語活動）だった。朝のスピーチから普段の生活を語り合うことを意識して実践している。重視すべきは、子供同士の思いや考えが往還することである。話し合いよりも聞き合いを意識していくことで、子供の思考は変容し、新たな価値が創出されていく。

○大分県佐伯市立渡町台小学校 2年生「マイ野菜を育ててお家の人にプレゼントしよう。」

オクラグループが「スプレーしても虫がいなくなる。どうしよう。このままでは、野菜がうまく育たない。」と困りごとを発表したところ、トマトグループから「トマト農家のおばあちゃんは、虫がいることは、人間にも野菜にもやさしい証拠と言っていたよ。」と教えてもらった話を聞く。その後、オクラグループの子は感想に「間引きや雑草とりをしていきたい。」と書き、虫への困りごとはなくなったようだった。対話を通して、往還した結果、自分の考えに変化があったようだ。新たな気づきを尊重させていきたい。

生活科の情報収集は、体験から得られた気づきである。質の高い体験・探究（子供の心を動かすような対象）を通して思考を深め、自分にとっての最適解を判断させるようにす

れば、自然と人に伝えたくなくなっていく。

○豊田市立五ヶ丘小学校 1年生 「作って・見つけて・考えて 虫との絆深めたい」

ダンゴムシの飼育を通して虫への愛着を深めてきた子供たちが、虫博士に出会い、標本にすることの価値や喜びに気付き、自分自身が成長していく。

本時では、虫博士から「ダンゴムシを標本にするためには、生きたままではだめ！」との助言があった。そこから、子供たちは考えを広げていく。「自分が育てているダンゴムシではいやだな」とじっと自分のダンゴムシを見て、ダンゴムシと対話する子供もいた。

「僕は、標本にはしない。かわいそうだし、ダンゴムシの人生が終わっちゃう。」と思いを伝え合った。どちらが良い、悪いではなく、子供たちが思考を繰り返し、じっくり考えられることが大切である。

そのために教師は、「子供の思考の流れを掌握する」「座席表に落とす」「授業前半の指名者の吟味」「教師の出番は、価値づけ、尋ね返し、焦点化、止め、待ち」などし、学び合いがさらに高まったり、深まったりするように導く必要がある。

○刈谷市立小垣江東小学校2年 生活科 「ようこそ1年生 はじまるよ2年生のわたし」

紙粘土作ったキャラクターを「マイキャラ」として名前をつけ、マイキャラをお供として活動した。活動の最後には、ワークシートには、マイキャラからのメッセージとして今日の活動を振り返る感想を記入させた。

「すごいね、頑張ったね。べんきょうも、もっとたのしくできるといいね。」

「発表のときのがちがちなおったね。」

「みんななかよく成長したよ。ほんとにすごいよ。」

普段あまり文章を書かない子も、マイキャラからの言葉とすると紙いっぱい記入できた。振り返りが楽しい時間となり、メタ認知（自分自身への気づき）につながる。

【生活から学びを創り生活に還すために】

- ・子供の思考は遊び（生活）と勉強（教科）の区別はなく、生活を一体的にとらえてその中で学んでいる。

【生活科とは、生活を科学する教科】

- ・知識は体験を通し実感を伴うことで経験となり、実際の生活場面で活用することで知恵となる。

【探究モードを踏まえた授業づくりで大切にしたいこと】

- ・ゴールの姿「自分で見つけた問いを自分の生活や生き方に生かす」を見通した子供が思考する授業を目指していく。
- ・子供が1時間を通して試行し続けるような発問の工夫が大切である。

【生活科の存在意義と教師の営みを読み解く】

- ・児童は「今日はどうか」「明日はどうなるかな」と日々の生活を楽しみにし、明日を心待ちにしながら過ごし、自分の世界を広げていく。（生活科の担う役割）

実践発表1

「かかわり・つながり」を大切にした生活科授業の創造 ～表現活動を通して～

1年生 生活科「かぞく大すき！～じぶんでできることにチャレンジしよう～」

北浜南小学校 青葉 花菜 先生

手伝いをすることで家族のために役立っているという実感を味わわせ、大好きな家族のために自分ができることにチャレンジしようという思いをもつことができるように単元名を設定した。



《実践》

(1) 児童が意欲をもって取り組むことができる活動

家庭生活を見つめ、「自分がやっていること」と「家の人の仕事」に分けて考えることで、家族の仕事の多さに気づかせた。また、仕事には「自分のためにやっていること」と「家族のためにやっていること」があり、自分も家族の一員として家族のために「自分でできること」と「お手伝い」の2つにチャレンジして「お手伝い名人」になるための「こつ」を身につけるよう取り組んだ。

(2) 伝え合う場の工夫

同じ手伝い同士の交流の後、違う手伝い同士での交流を行った。「ぼくもお皿洗いやってみようかな。」「自分で布団を敷けるなんてすごいね。」など、家で体験したお手伝いの「こつ」を伝え合うことで、自分の考えを深めることができた。

(3) 児童が継続的に取り組むことができる活動

○チャレンジメーターの活用

黒板に大きな「チャレンジメーター」を貼り、「大好きな家族のために自分でできることにチャレンジする」という目標を達成するごとに1時間ずつ「チャレンジメーター」を増やしていくことで、意欲を持続させることができた。

○宣誓書による決意表明

活動の初めに「宣誓書」を書くことで、学習が終わった後も、家庭の中で自分でできることを続けて実践するという決意を示し、家族の中での役割を自覚するとともに、自分のことは自分でするという自立した生活へとつなげるようにした。

○記録カードの保護者からの言葉

保護者には、活動の目的やポイントが伝わるように、記録カードを作成した。「こつ」にポイントを置くことで、児童にも保護者にも学習の流れがつかめるようにした。

《成果と課題》

- 友達と交流してこつを見付ける活動では、実際に使う物を使って交流することで、言葉だけでは伝わりにくい動作や手順も伝わりやすくなった。
- 保護者から「手伝ってくれてありがとう」「きれいにしてくれてありがとう」などの言葉をもらうことで、児童の手伝いに対する意欲が増した。
- それぞれの家庭で使っているものが違うため、細かな点に戸惑い、違いを見つける活動になってしまったグループがあった。事前に違いを押さえておく必要があった。

実践発表2 「かかわり・つながり」を大切にした生活科授業の創造 ～2年「もっとなかよし まちたんけんの実践を通して～

入野小学校 清水 理子 先生

自分たちが生活している地域の人や場所への愛着を深め、これからの生活へとつなげていけるよう「かかわり・つながり」を大切に
した生活科授業の創造をテーマに設定した。



《実践》

(1) ゴールイメージを持たせる単元の導入

単元の初めに教師のお気に入りのパン屋さんを紹介した。「みんなの家の周りにも、紹介したいところはあるかな。」と問いかけると紹介したい思いをもつ子が多くいた。単元のゴールには、「自分たちのグループが調べる場所のひみつを見つけて、ほかのグループに紹介しよう。」という目標を設定した。

(2) 思いに合わせた楽しい活動

町のひみつをキーワードに学習を進め、教師が選んだ8つの場所の中から、同じところを調べたい子供たち同士でグループを作った。また、探検に行くときや発表を行う際には、おそろいの「探検バッチ」を付けるようにした。バッチを付けることで、探検する場所に対して特別な思いをもったり、同じグループの仲間との仲間意識が芽生えたりして、より主体的に活動することができた。

(3) 試行錯誤や繰り返す活動の設定

同じ場所への訪問を合計3回行った。1回目の活動から得た気づきを友達に伝えることで自分の気づきを自覚したり、友達のよいところを自分たちの活動へつなげたりして、意欲的に2回目の探検へ行くことができた。その後、パンフレットやポスターに探検で見つけた秘密をまとめ、お礼の手紙と一緒に3回目の訪問をした。

(4) 伝え合い、交流する場の設定

グループ同士の交流では、タブレットで撮影してきた写真をオクリンクでつなげ、提示しながら発表した。全体を前半グループと後半グループに分けて半分ずつ交流することで、発表する人は何度も発表することができ、自分の気づきを自覚したり、自信をもって発表したりすることができた。

《成果と課題》

- 繰り返し訪問することで、少しの変化に気付いたり、「ひと」や「もの」との関わりを深めたりできた。家庭でその場所の話をしたり、家族と一緒に訪問したりと自分たちの生活する地域や場所に愛着をもって進んで触れ合う子供が多く見られた。
- 「ひみつ」というキーワードを使って、「みんなに地域の秘密を紹介しよう」という目的意識をもたせることで、単元を通して意欲的に活動することができた。
- 保護者ボランティアの協力を得たが、8グループに分かれての活動が限界だった。すべての子供たちの思いに沿いながら、グループを選択させていく方法を検討していく必要がある。また、同じ時間に探検に行けるよう、日時調整の難しさも感じた。コミュニティースクールの活動と合わせて行っていけるようにしたい。